関連学会印象記

第21回日本Shock学会総会

高橋 徹*

第21回日本Shock学会総会は，札幌医科大学医学部第1外科教授，平田公一会長のもと，平成18年5月18日(木)・19日(金)にホテル札幌ガーデンパレスで開催された。ガーデンパレスは，赤レンガで有名な北海道庁旧本庁舎に隣接し，会場となったホテル2階はA，Bの2会場，ロビー，休憩室がコンパクトにまとまっており，発表，討論をするのに最適の環境であった。

前回，平成10年に当地で開催された本学会に参加した折，大通公園で寒さに震え上がった思い出があったので，コートを持参したが，今回はその必要も無く，穏やかな天候であった。ライラック，ハルニレ，ハマナス，ツツジなどが咲きあふれ，街中花の香りで満ち溢れる北海道の初夏を満喫できた。岡山から参加した小生は同じ年に2度の桜を賞でるという幸運にも恵まれた。

総会前夜にはイブニングセミナーが開かれ，東京医科大学八王子医療センターの池田寿昭先生が「敗血症患者におけるALI/ARDSに対する治療戦略の検討」と題し，豊富な臨床経験を基とした実戦的なALI治療のお話をされた。講演に引き続き，意見交換会が行われ，いずれの分野においても厳しい最近のお互いの現況について語りあった。

「Shock状態からの蘇生に成功しても重症感染症を背景としているか，臓器不全を合併している場合の予後は楽観できない。したがって，そのような治療困難なShockとそれに関連した病態に関し最善の治療を提言していく必要がある。」今回の総会では，平田会長のこのコンセプトに基づき，A会場において午前に“侵襲と臓器不全のホットトピックス～発生機序と抑制”というテーマでワークショップが，午後には“重症敗血症治療の最前線”というテーマでシンポジウムが企画された。ワークショップでは，Sepsisモデルを用いて高気圧酸素療法のBacterial translocationに対する抑制効果と，炎症性メディエーター: High mobility group box-1(HMGB-1)のSepsisへの関与が示された。また，メタボリックシンドロームにおいて減少することが知られている脂肪組織分泌蛋白: アディポネクチンが，エンドトキシンと結合することにより抗炎症作用をもたらす可能性があるとの興味深い報告がなされた。臨床研究では，肝切除周術期おける血清乳酸値とUrinary Trypsin Inhibitorの意義が報告され，ARDSにおけるアルブミン輸注の是非も討議された。シンポジウムではCytokine関連遺伝子解析によりhigh-risk群と診断されたSepsis症例にはcytokineをより強力に除去する血液浄化法を導入し，tailor-made medicineを確立することで重症患者の救命率改善を目指すとの提言がなされた。また，ワークショップで討議されたHMGB-1が臨床においてもSepsis患者の予後を決定する要因として重要で，血液吸着によるHMGB-1の除去が治療に有用ではないかとの意見が出された。さらに，ヒト白血球におけるToll-like Receptor 4(TLR4)の発現測定や，多項目の炎症性メディエーターの同時定量など，重症感染症治療に直結した臨床検査法が紹介された。ワークショップでは慶応義塾大学救急部・相川直樹先生，札幌医科大学麻酔科・並木昭義先生，シンポジウムでは札幌医科大学救急集中治療部・浅井康文先生，日本医科大学外科・宮下正夫先生の司会のもと，臨床医学・基礎医学，両分野からShock治療の今後の方向性を示唆する有用な討議がなされ，会長が目指された当初の目的は達成されたのではないかと感じた。

特別講演では札幌医科大学法医学講座の松本博志

*岡山大学大学院医歯薬学総合研究科麻酔蘇生学分野

Presented by Medical*Online

御挨拶をされる平田公一会長

先生が「エンドトキシンと臓器相関」と題し，TLR4を介するエンドトキシンによる細胞シグナル伝達系へのアルコールの関与について解説された。

B会場では終日，一般演題の発表が行われた。全て口演であったので，内容を集中して理解することができた。しかし，一演題あたり討論も含めて8分の発表時間は，演者，聴衆ともにShock関連分野に造詣の深い本学会においては少し短いとの印象を受けた。

学会は一般演題35題，出席者はおよそ150名ということであった。学会に際して行われた理事会，評議員会では，実際に研究に携わっている若手の学会員，学会参加者の人数が少ないことが取り上げられた。専門医取得と直接関係の無い本学会のような集まりでは，非常に多数の参加者を望むのは無理があろうと思われる。しかし，外科，救急，麻酔，集中治療などの臨床領域のみならず基礎医学の領域においてもShockに興味を持つ方々が集い，最先端の発表・討議がなされるという誠に有意義な会である。実際，本学会で新たな視点から研究発表の問題点を指摘され，小生も目から鱗が落ちる思いをしたことが度々である。また，日本Shock学会は米国Shock学会，ヨーロッパShock学会などとともに，International Federation of Shock SocietyのBranchを構成しており，本学会事務局長の千葉大学名誉教授，平澤博之先生は国際誌："SHOCK"(impact factor: 3.12)のAssociate Editorを務めておられる。"SHOCK"の取り扱う領域はいわゆるShockのみならずInjury，Inflammation，Sepsisの基礎・臨床研究に及んでいる。この紙面を借りて，是非，コメディカルを含むShockに興味のある方々の本学会への参加を募りたい。

昨今，学会運営はコンベンションに依頼する場合が多いが本学会は札幌医大第一外科の教室員のご尽力により催された。スタッフのご苦労は大変であったろうとお察したが，スムーズかつ心のこもった温かみの感じられる学会となっていた。温厚篤実な会長，平田先生のお人柄が反映されていると思ったのは筆者だけではないであろう。

Presented by Medical*Online